

AKITA Biz Forest

あきたBizフォレスト TOPインタビュー

TOP INTERVIEW

秋田県立大学

学長 小林 淳一 氏

1948(昭和23)年長野県上田市生まれ。東北大学大学院工学研究科博士学位取得。(株)日立製作所にて主管研究員、ソリューションセンタ長等を歴任し、2007(平成19)年秋田県立大学システム科学技術学部教授に就任。機械知能システム学科長、理事兼副学長を経て、2017(平成29)年4月より現職。



大学の経営や中期計画にもPDCAサイクルを回す企業体質を!

工藤 来春から長野大学の学長になられるとのこと。おめでとうございます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。早速ですが小林学長の生い立ちからお聞かせ下さい。

小林 ありがとうございます。私は1948(昭和23)年に長野県上田で生まれました。上田の冬は晴天が毎日のように続きますが朝は猛烈に寒くてマイナス10度以下もざらにあります。一方で昼はよく陽が当たり、外は風も少ないので日向ぼっこできるほど気持ちいい。こちらに来てもう16年冬を経験しましたが、秋田の冬には中々慣れません(笑)幼少の頃は野球を一生懸命やりました。あと冬になると溜池に張った氷の上で下駄スケートを楽しんでいました。知らないかな!? 苦笑。高校までは長野で過ごしました。元々車が好きでメカニックが好きだったので、東北大学工学部機械工学科を選び進学しました。

工藤 なるほど。では卒業されてからはメカニックの道に?

小林 そうですね。最初は大学のポストがあると聞いていたのですが、話がうやむやになってしまい1976(昭和51)年の10月に日立製作所に入社しました。その年は相当な不況で採用予定はゼロ計画だったそうですが、そんなことはつゆ知らず、指導教員の先生からの勧めで同社研究所の面接を受けることになりました。流体力学の専門家ということをやアピールし採用になったのですが、よく受かったね。と不思議がられ周りに貴重がられました。当時は事業部からの研究依頼を受けてそれを行う仕事をしていました。半導体な

ども調子がよかった時期で、そこだけで年間何百億の利益が出た良い時代でした。当時会社で面白かったのは運動会です。単なる運動会ではありません。1か月前からチームで入念に作戦を練りこむため、半分仕事そっちのけのような人もいました。どうしたら勝つのか? どうしたら一番いいのか? などをトコト考えます。意図していたかは判りませんが、後に思えば、会社で課題が発生したときにどうやって解決するのか? を考えたり経験させたりするトレーニングの場になっていたようにも思います。

工藤 面白いですね! どんな企業でも日常とは少し違った角度で考えて実行するという場があると、結果として仕事への気づきもあったりしますね。なるほどです。

小林 あの頃はターゲットが明確でした。一時は世界の6~7割のシェアを占めていた日本の半導体ですが、現在はシェアを大きく落としています。そして日本全体の生産性はフラットで伸びていません。アメリカ、中国、韓国などの伸びている国との違いはイノベーションが生まれなかったということだと思えます。イノベーションは自分たちである程度リスクを負わないといけませんが、そういったところにまだまだ日本人はついていけない気がします。ただ今回のサッカーW杯じゃないですが、ああいうことをきっかけに日本人はまだ頑張れる! ということを若い人が気づいてチャレンジすることによってが本当に大事なことだと思います。例えば我々の時代には絶対に善とされなかった漫

画やアニメも、今は立派なビジネスやカルチャーになっています。eスポーツなど新しい分野にも、これからはドンドン入っていくべきだと思います。

工藤 確かにそうですね。昔はゲームばかりしない! とか叱られたことが、今や注目のビジネス分野ですからね。不思議というか皮肉なものですね。ちなみに日立製作所には何年勤務されていたのですか? そして、いつ何がきっかけでなぜ秋田に?

小林 日立製作所には30年勤務しました。皆さんによく聞かれる「なぜ秋田にきたのか?」に繋がる話なのですが、2000年代に入ってから、ただモノを作っても売れない時代に入りました。徐々に外からの依頼も増えていった、ある時に秋田県立大学からコンピューターを使って機械を設計する授業がしたい。という相談依頼があり、2000年頃に本荘キャンパスにある機械系の学科の授業の任務を受け、それを私も担当しました。

工藤 なるほど。その実績を買われスカウトされた! ということですね。

小林 まあ、そんな感じですかね。2007年から4年間本荘で授業を受け持っていました。2011年前学長の小間先生が学長になられる際に、副学長就任の要請を受け、理事兼副学長になりました。2011年から6年間は大学の教育担当を全任されましたが、色んな意味で貴重な経験でした。始めは企業で教えるのも大学で教えるのも同じだろう、

あきたBIZフォレストTOPインタビューは、秋田の起業家と企業環境を応援することを宣言いただいた100名以上の経営者の皆様を中心に、起業家に役立つ話題と起業家へのメッセージを対談形式でまとめたものです。

と考えていましたが、実際は全く違うものでした。企業は教える側が必要なことは全て言い、教わる側は聞かなかつたら本人が損するだけ。ところが大学では横を向いていたらこちらを向かせ、興味がない生徒も興味を持たせないといけない。今は昔のように、単なる知識を一方向的に伝える授業では通用しない。また時に緊張感を持たせなければならない場面もあります。その後2017(平成29)年から学長になり、来春までの任期となります。

工藤 なるほど。教育担当は難しいとのことでしたが、学長という立場はいかがですか?

小林 大学のすべての責任があるという点では、やはり精神的に全く違います。公立大学は設置者である秋田県との約束事を中期目標・中期計画の中に織り込んで6年間やります。私は秋田県立大学に関わってからずっと思っていたのが、一般の教員からは中期計画が見えづらいということ。皆がきちんとそれを意識して普段の教育研究などをしていないのに、中期計画と今やっていることが余り密接に繋がっていなかったと思います。そこで各学部において中期計画の各項目に対して綿密なアクションプランを作成し、かつ継続的に目標を管理できる仕組みがきちんとしてきているか? を踏まえ、民間企業と同じようにPDCAサイクルを回すことを目指しました。3年くらいかけてようやく形になりましたね。

工藤 確かに企業体質でなければ「計画→実行→評価」で終わるケースも多いですね。特に中期計画などは「C→A」に繋がら

していかないと、うまく行きにくいですね。他に小林学長として大学の課題と感じていることはありますか?

小林 社会評価を上げていくためにどうしたらよいかということでしょうか。本大学はTHE(Times Higher Education)が発表する世界大学ランキング日本版でも実は上位10%くらいに入るんですよ。でも地域社会からの思われ方とは少しギャップがあると思っています。本学も県民の方が困っていることを大学の知恵で解決するという、小単位の地域貢献などはたくさんやっていますが、中々伝わっていないのが現状です。今後は大学全体で何かに取り組み、その成果もきちんと発信していく。これがプレゼンスを上げるのに一番よいと思っています。一例として、現在「スマート農業」というものと「航空機の電導化」というものを内閣府のプロジェクトとして行っています。方向性としてはこの大学があつてよかったね、と県民の皆様にご理解いただけるような成果。スマート農業に関しても、秋田の過疎に対して大学として新しい提案ができと思っています。

工藤 何だかワクワク感があるお話ですね。ありがとうございます。最後に秋田でこれから発展するポテンシャルが高そうな分野な

ど、小林学長からみてございますか?
小林 風車や再生可能エネルギーですね。設備投資が圧倒的にあり、洋上風力等もこれからまだまだでてくる。これをどうやって秋田の暮らしに還元するか? ではないかと思っています。ひとつはIoTのセンサー等を使って兆候を見て、トラブルが起きる前に部品を交換するなどが予測可能なメンテナンスとができますと面白そうです。また発生したエネルギーを使って地元産業を活性化させる事業。これが一番だと思います。現在本大学では機能性野菜を作っていますが、この電力を使用し冬も栽培する周年農業として野菜を作る。そして付加価値のある野菜を首都圏のデパ地下などでそれなりに高く売る。

早朝ウォーキングと音楽でリフレッシュ

早朝のウォーキングが日課とおっしゃる小林学長ですが、昔は15キロ程走っていた頃もあるそう! プライベートでは音楽が大好きとのこと、少しでもオーディオにも拘って、自室では青春時代によく聴かれていた昭和のニューミュージックなどを聴き、リラックスされているそうです。

本日は貴重なお時間とお話を本当に有難う御財増した。

インタビュー

合同会社ジェグルス(共同事業体ジェイワン) アントレプレナーコンシェルジュ 工藤 実

ライター J-MOTHER'S 藤田 幸

企 画 共同事業体ジェイワン(秋田市ビジネススタートアップ支援事業)



※撮影のために一時的にマスクを外しています。